

令和8年度殺菌殺虫剤実験展示圃調査実施要領

A. 水稻病害

(1) 種子消毒剤

① もみ枯細菌病, 苗立枯細菌病

移植7日前から移植日までの間に、50箱について、下記の基準で腐敗苗の発生状況を調査し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A: 1箱の51%以上の苗が腐敗している箱数
- B: " 31~50% "
- C: " 11~30% "
- D: " 10%以下 "
- E: 発生なし

② ばか苗病, 褐条病

移植7日前から移植日までの間に、50箱について、下記の基準で腐敗苗の発生状況を調査し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A: 1箱の発病苗数が201本以上の箱数
- B: " 51~200本 "
- C: " 11~50本 "
- D: " 1~10本 "
- E: 発生なし

③ 苗いもち, ごま葉枯病

移植7日前から移植日までの間に、50箱について発病箱率を調査する。

(2) 葉いもち

7月20~25日頃に、25株について下記の基準で調査し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 25)\} \times 100$$

- A: 下葉は枯死し、完全なズリコミ症状を呈する
- B: 病斑がかなり見られ、軽いズリコミ症状を呈する
- C: 病斑がかなり見られる
- D: 病斑がわずかに見られる
- E: 病斑なし

(3) 穂いもち

収穫直前に、25株について下記の基準で調査し、発病穂率を算出する。

$$\text{発病穂率} = \{(A + B) / 5C\} \times 100$$

- A: 穂首が罹病し白穂となった穂数
- B: 一次枝梗以上が侵され枯死している穂数
- C: 5株あたりの穂数

(4) 紋枯病

① 播種同時または育苗箱施用

a 初期の発病調査：7月10日頃に畦畔から4～5列目の50株を任意に選び、発病株率を調査する。

b 被害度予測調査：8月10日頃に下記の基準で調査し、被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \frac{(1.62B - 32.4) \times A}{100} \quad (\text{マイナスの場合は0とする})$$

A：初期の発病調査と同一の50株についての発病株率

B：病斑高率 = (最上位病斑高 (cm) / 草丈 (cm)) × 100

② 本田防除

a 散布前調査：畦畔から4～5列目の50株を任意に選び、発病株率を調査する。

b 散布後調査：8月10日頃に下記の基準で調査し、被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \frac{(1.62B - 32.4) \times A}{100} \quad (\text{マイナスの場合は0とする})$$

A：散布前と同一の50株についての発病株率

B：病斑高率 = (最上位病斑高 (cm) / 草丈 (cm)) × 100

(5) 白葉枯病

8月中旬に次のいずれかの方法により調査する。

① 上位2葉の病斑面積率による場合

1区50株を任意に選び、株ごとに上位2葉について病斑面積の和を下記の基準によって概観し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{(6A + 5B + 3C + D)}{(6 \times 50)} \right\} \times 100$$

A：全葉面積発病した株数

B：病斑面積の和が調査葉面積の2/3以上の株数

C：病斑面積の和が調査葉面積の1/3～2/3の株数

D：病斑面積の和が調査葉面積の1/3以下の株数

E：病斑の認められない株数

② 圃場の白変面積率による場合

坪状に白変した箇所の面積を達観により調査し、圃場全面積に対する白変面積率を算出する。

(6) 稲こうじ病

成熟期に、任意の25株について発病株率および発病穂率を調査する。少発生の場合は100株について発病株率を調査する。

(7) 変色米

収穫時に、畦畔4～5列目から100穂を任意に抜き取り、精玄米100g中の暗色米および腹黒米の混入率を調査する。

(8) ごま葉枯病

収穫の約10日前に、任意の25株について穂枯程度別に調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{(3A + 2B + C)}{(3 \times 25)} \right\} \times 100$$

A：穂枯が1株穂数の2/3以上

B： " 1/3～2/3

C： " 1/3以下

D：穂枯が認められない

(9) 苗立枯病（ピシウム菌・フザリウム菌・リゾープス菌・トリコデルマ菌）

育苗後期に、200本について、下記の基準で発病苗数を調査し、発病苗率を算出する。発病後間もない頃の方が病徴を観察しやすい場合があるので、この時期に中間調査を行うことが望ましい。

ピシウム菌：変色枯死苗、生育不良の黄化苗、地際及び根部の水浸状壊死苗

フザリウム菌：萎凋枯死苗、地際部褐変苗、根部褐変苗

リゾープス菌：種子根および冠根先端の異常肥大と伸長停止苗、生育不良苗、枯死苗

トリコデルマ菌：地際部及び根部の褐変苗、枯死苗

(10) 苗立枯病（リゾクトニア菌）

移植直前に、200本について、下記の基準で発生状況を調査し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{(3A + 2B + C)}{(3 \times 200)} \right\} \times 100$$

A：本葉第3葉まで「葉腐れ」が発生している本数

B：本葉第2葉まで「葉腐れ」が発生している本数

C：本葉第1葉まで「葉腐れ」が発生している本数

B. 水稻害虫

(1) イネミズゾウムシ

① 播種同時または育苗箱施用、直播栽培

5月末～6月初めに、任意の50株について食害株率と寄生成虫数を調査する。

② 水面施用

平年発生の下では、5月20～25日頃に処理する。散布前と散布5～7日後に、任意の50株について食害株率と寄生成虫数を調査する。

(2) イネドロオイムシ

① 播種同時または育苗箱施用

6月15日頃に任意の25株について幼虫数を調査する。

② 水面施用

平年発生の下では、5月20～25日頃に処理する。6月15日頃に任意の25株について幼虫数を調査する。

(3) セジロウンカ、ツマグロヨコバイ

7月20～30日に薬剤の散布適期がくる。散布前と散布7～10日後（次の散布前）に、20回振りのすくい取りで成虫数と幼虫数を種類別に調査する。

(4) ニカメイチュウ

1世代に対する効果は7月上旬に任意の50株について、2世代については8月中下旬に任意の50株について、食害株率を調査する。

(5) カメムシ類

出穂期～傾穂期に薬剤散布する。収穫時に畦畔沿い2～3列目から100穂を抜き取り、精玄米100g中の斑点米混入率を調査する。

(6) コブノメイガ

平年では8月上旬が散布適期となる。散布前と散布7～10日後に任意の50株について、被害株率を調査する。散布後の調査は散布前の調査株と同一とする。

(7) イナゴ類

6月下旬と7月中旬に、圃場の周辺部と中央部の2カ所で、20回振りのすくい取りを行い、成・幼虫別に生息虫数を調査する。粉剤の場合、7月中旬の幼虫期が防除適期であり、散布前と散布3～5日後に、上記調査を行う。

(8) コクゾウムシ（玄米）

貯蔵直前に処理し、6月中旬～7月上旬に表層部から3合を取り出し、生息する虫数を調査する。無処理（10升以上）を必ず設定すること。なお、処理区と無処理区の玄米量は同一とする。

(9) フタオビコヤガ

播種同時または育苗箱処理の場合：6月中旬と7月中旬に、圃場内の任意の2カ所で、20回振りのすくい取りを行い、幼虫数を調査する。粉剤の場合、散布前と散布5日から7日後に、上記調査を行う。

C. 水稻薬害

(1) 収量調査

水稻生育診断技術確立調査に準ずる。

D. 麦・大豆病害虫

(1) 赤かび病（オオムギ）

成熟期に任意の25茎について発病程度別に調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{(6A + 3B + C)}{(6 \times \text{調査葉数})} \right\} \times 100$$

A：穂の2/3以上の小穂または粒が発病しているもの

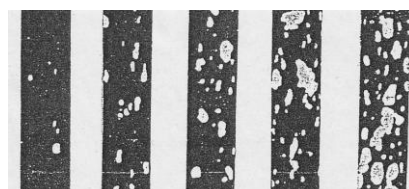
B：穂の1/3～2/3の小穂または粒が発病しているもの

C：穂の1/3以下の小穂または粒が発病しているもの

D：発病なし

(2) うどんこ病（オオムギ）

散布前および散布の2週間後に、任意の25茎について株あたり上位3葉の発病面積率を調査し、その平均を求める。発病面積率は下図の基準に従う。



1% 5% 10% 20% 30%

(3) 紫斑病

任意の25株から株あたり4莢、計100莢を採取し、紫斑病率を調査する。

(4) 茎疫病

任意の50株について、散布2週間後の発病株率を調査する。

(5) ハスモンヨトウ (ダイズ)

散布前と散布14日後 (IGR剤) に100株あたりの寄生虫数を調査する。

(6) カメムシ類 (ダイズ)

収穫時に20株を脱粒調製し、被害粒率を求める。

(7) フタスジヒメハムシ (ダイズ)

立毛中の散布剤：①薬剤処理前と7日後に任意の50株について、寄生成虫数を調査する。

②収穫時に50株を脱粒調製し、被害粒率を求める。

播種時処理剤：①播種30日後に任意の5株について、幼虫の根粒菌食害率を調査する。根粒菌食害の有無は、肉眼により行う。

②7月下旬、8月下旬に任意の50株について、寄生成虫数を調査する。

(8) アブラムシ類

立毛中の散布剤：薬剤処理前と7日後に任意の50株について、寄生成虫数を調査する。

播種時処理剤：播種30日後に任意の50株について、寄生成虫数を調査する。

(9) ネキリムシ類

発芽時から本葉展開初期の間に、任意の50株について被害株率を調査する。

(10) マメシンクイガ

収穫時に20株を脱粒調製し、被害粒率を求める。

(11) ハダニ類

散布前および最終散布の5～10日後に、任意に選んだ10株について、各株の中位葉3枚の平均虫数を下記の基準によって調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 10)} \right\} \times 100$$

A：株あたりの寄生虫数が51匹以上の株数

B： " 11～50匹 "

C： " 3～10匹 "

D： " 1～2匹 "

E. 小豆病害虫

(1) 灰色かび病・菌核病

散布前および散布の7～10日後に20株について発病率を求める。

(2) アズキノメイガ

収穫時に20株について被害率を求める。

E. 野菜病害

(1) トマト

① 灰色かび病

最終散布の約10日後に、任意の10株について果実ごとに発病の有無を調査して、株ごとの発病果率を求め、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 10)} \right\} \times 100$$

A : 発病果率が21%以上の株数

B : " 11~20% "

C : " 6~10% "

D : " 5%以下 "

E : 発病なし

② 疫病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株について調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 10)} \right\} \times 100$$

A : 茎葉の70%以上に病斑が発生

B : " 50~69% "

C : " 10~49% "

D : " 10%未満 "

E : 病斑なし

なお、少発生の場合は任意の10株を選び、株内の同一位置の葉について5葉の発病(小)葉率を調査する。

③ 葉かび病・すすかび病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株を選び、株内の同一位置の葉について、株あたり5葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 50)} \right\} \times 100$$

A : 全小葉に病斑が発生

B : 小葉の2/3以上に病斑が発生

C : 小葉の1/3以上2/3未満に病斑が発生

D : 小葉の1/3未満に病斑が発生

E : 病斑なし

なお、少発生の場合は、発病(小)葉率を調査する。

④ 輪紋病

葉かび病に準ずる。

なお、少発生の場合は、任意の10株を選び、株内の同一位置の葉について5葉の発病小葉率あるいは小葉あたりの病斑数を調査する。

⑤ 菌核病

散布前および最終散布の約1週間後に、任意の10株を選び、株内の全果実について発病の有無を調査し、発病果率を算出する。

⑤ 萎ちょう病

発病株率、枯死株率を調査する。また、収穫終了後、地際部の茎を切断し、維管束の褐変について下記の基準により調査し褐変度を算出する。

$$\text{褐変度} = \{(3A + 2B + C) / (3 \times \text{調査株数})\} \times 100$$

- A : 2 / 3 以上の維管束が褐変している株数
- B : 1 / 3 以上 2 / 3 未満の維管束が褐変している株数
- C : 1 / 3 未満の維管束が褐変している株数
- D : 褐変のない株数

⑥ うどんこ病

散布前および最終散布の約 10 日後に、任意の 10 株を選び、株内の同一位置の葉について。株あたり 5 葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A : 全小葉に病斑が発生
- B : 小葉の 2 / 3 以上に病斑が発生
- C : 小葉の 1 / 3 以上 2 / 3 未満に病斑が発生
- D : 小葉の 1 / 3 未満に病斑が発生
- E : 病斑なし

なお、少発生の場合は、発病小葉率、あるいは小葉当たり病斑数を調査する。

(2) なす

① うどんこ病

散布前および最終散布の約 10 日後に、任意の 25 株について 1 株 1 主枝の全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A : 1 葉の病斑面積率が 51% 以上
- B : " 26 ~ 50%
- C : " 6 ~ 25%
- D : " 5% 以下
- E : 病斑なし

② 灰色かび病・菌核病

散布前および最終散布の約 1 週間後に、任意の 10 株を選び、株内の全果実について発病の有無を調査し、発病果率を算出する。

③ 青枯病

散布前に 1 回および最終散布から 10 日毎に 3 回、任意の 25 株の発病（萎ちょう）の有無を調査し、発病株率を算出する。なお、調査は極力晴天日の午後に行う。
※青枯病対象の茎葉散布剤は初めての試験であるので、調査中に不明な点や問題が生じたときは別途協議する。

(3) すいか

① うどんこ病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の5株について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A : 1葉の病斑面積率が76%以上
- B : " 51～75%
- C : " 26～50%
- D : " 25%以下
- E : 病斑なし

② 炭疽病・つる枯病

散布前および最終散布の約1週間後に、任意の5株を選び、株内の同一位置の葉について株あたり10葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A : 病斑が葉面積の1/2以上を占める
- B : " 1/4～1/2未満
- C : " 1/4未満
- D : 病斑がわずかに(数個)認められる
- E : 病斑なし

なお、少発生の場合は任意の100葉を調査し発病葉率を算出する。

③ 菌核病

(a) 茎の発病による場合

散布前および最終散布の約1週間後に、任意の10株について茎の発病箇所数を調査し、株あたり発病株数を算出する。

(b) 果実の発病による場合

最終散布の約1週間後に、任意の10株について全着生果実の発病の有無を調査し、発病果率を算出する。

④ 褐色腐敗病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株について調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 10)\} \times 100$$

- A : 茎葉の70%以上に病斑が発生
- B : " 50～69% "
- C : " 10～49% "
- D : " 10%未満 "
- E : 病斑なし

なお、少発生の場合は任意の10株を選び、株内の同一位置の葉について5葉の発病(小)葉率を調査する。

(4) メロン

① うどんこ病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A : 1葉の病斑面積率が76%以上
- B : " 51~75%
- C : " 26~50%
- D : " 25%以下
- E : 病斑なし

(5) きゅうり

① べと病・炭疽病・褐斑病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の5株を選び、株内の同一位置の葉について株あたり10葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A : 病斑が葉面積の1/2以上を占める
- B : " 1/4~1/2未満
- C : " 1/4未満
- D : 病斑がわずかに(数個)認められる
- E : 病斑なし

なお、少発生の場合は発病葉率および1葉あたりの病斑数を調査する。

② 灰色かび病・菌核病

収穫時(最終散布の約1週間後)に任意の20果について発病の有無を調査し、発病果率を算出する。

③ うどんこ病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A : 1葉の病斑面積率が76%以上
- B : " 51~75%
- C : " 26~50%
- D : " 25%以下
- E : 病斑なし

④ 斑点細菌病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株を選び、株内の同一位置の葉について株あたり10葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 100)\} \times 100$$

- A : 葉の全面に発病し、黄化または枯死
- B : 葉の2/3以上の部分に発病
- C : 葉の1/3~2/3未満の部分に発病
- D : 葉の1/3以下の部分に発病
- E : 病斑なし

(6) かぼちゃ

① うどんこ病

散布前および最終散布の約1週間後に、任意の5株について株あたり10葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A : 病斑が葉面積の1/2以上を占める
- B : " 1/4～1/2未満
- C : " 1/4未満
- D : 病斑がわずかに(数個)認められる
- E : 病斑なし

② 疫病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株について調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 10)\} \times 100$$

- A : 茎葉の70%以上に病斑が発生
- B : " 50～69% "
- C : " 10～49% "
- D : " 10%未満 "
- E : 病斑なし

③ つる枯病

散布前および最終散布の約1週間後に、任意の5株を選び、株内の同一位置の葉について株あたり10葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A : 病斑が葉面積の1/2以上を占める
- B : " 1/4～1/2未満
- C : " 1/4未満
- D : 病斑がわずかに(数個)認められる
- E : 病斑なし

なお、少発生の場合は任意の100葉を調査し発病葉率を算出する。

(7) いちご

① 灰色かび病

最終散布の7～10日後に、臭覚適期の果実100果を選び、発病果率を調査する。

② うどんこ病

(a) 発病葉による場合

散布前および最終散布の約1週間後に、任意の5株を選び、株内の同一位置の葉について株あたり5葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 25)\} \times 100$$

A : 病斑が葉面積の50%以上を占める

B : " 25～50%未満

C : " 10～25%未満

D : " 10%未満

E : 病斑なし

なお、少発生の場合は任意の100(小)葉を調査し、発病(小)葉率を算出する。

(b) 発病果による場合

最終散布の7～10日後に、臭覚適期の果実100果を選び、発病果率を調査する。

(8) だいこん

① 亀裂褐変症 (リゾクトニア菌)

収穫時に任意の20株について、発病の有無及び発病程度を下記の基準によって調査し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 20)\} \times 100$$

A : 病斑面積率が10%以上

B : " 5～10%

C : " 1～5%

D : " 1%未満

E : 病斑なし

* アファノマイセス菌による症状と混同しないようにする。

② 軟腐病

収穫の7～10日前に、50株について発病株率を調査する。

③ わっか症 (リゾクトニア菌)

収穫時に任意の20株について、発病の有無及び発病程度を下記の基準によって調査し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 20)\} \times 100$$

A : 1株当りの病斑数が20個以上

B : " 10～20個未満

C : " 5～10個未満

D : " 1～5個未満

E : 病斑なし

(9) かぶ

① 根こぶ病

収穫時(晴天日の午後)に、50株について萎ちょう株率を調査する。

(10) はくさい

① 軟腐病

収穫の7～10日前に、50株について発病株率を調査する。

② 根こぶ病

収穫時（晴天日の午後）に、50株について萎ちょう株率を調査する。

③ べと病

収穫時に、任意の20株を選び、発病の有無および発病の程度を次の基準によって調査し、発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 20)\} \times 100$$

A：病斑が外葉の全てに発生している

B： " 2/3以上にみられる

C： " 1/3～2/3みられる

D： " 1/3未満にみられる

E：発病なし

(11) キャベツ

① 黒腐病

収穫時に任意の50株を選び、発病程度を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

A：株を真上から見て病斑面積率が31%以上

B： " 21～30%

C： " 11～20%

D： " 10%以下

E：発病なし

② 軟腐病

収穫の7～10日前に、50株について発病株率を調査する。

③ 根こぶ病

収穫時（晴天日の午後）に、50株について萎ちょう株率を調査する。

④ べと病

収穫時に任意の50株について発病株率を調査する。

⑤ 菌核病

収穫時に任意の50株について発病株率を調査する。

(12) ブロッコリー

① 根こぶ病

収穫時（晴天日の午後）に、30株について萎ちょう株率を調査する。

② 黒腐病

最終散布の1週間後または収穫時に任意の30株を選び、発病程度を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 30)\} \times 100$$

- A：株を真上から見て病斑面積率が31%以上
- B： " 21～30%
- C： " 11～20%
- D： " 10%以下
- E：発病なし

③ 黒斑細菌病

最終散布の1週間後または収穫時（効果の差が明らかになった時期）に、任意の30株について、発病程度別に調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(3A + 2B + C) / (3 \times 30)\} \times 100$$

- A：2/3以上の外葉または花蕾にも発病が認められる
- B：1/3～2/3未満の外葉に発病が認められる
- C：1/3未満の外葉に発病が認められる
- D：発病なし

④ 軟腐病・花蕾腐敗病・菌核病

最終散布の1週間後または収穫時（効果の差が明らかになった時期）に、任意の30株について、発病程度別に調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(3A + 2B + C) / (3 \times 30)\} \times 100$$

- A：花蕾の50%以上に発病が認められる
- B：花蕾の50%未満に発病が認められる
- C：花蕾の一部に発病が認められる
- D：発病なし

⑤ べと病

最終散布の1週間後または収穫時（効果の差が明らかになった時期）に、任意の30株について、発病程度別に調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 30)\} \times 100$$

- A：病斑が全ての葉に発生している
- B： " 2/3以上の葉にみられる
- C： " 1/3～2/3の葉みられる
- D： " 1/3未満の葉にみられる
- E：発病なし

(16) ねぎ

① さび病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の50株について発病程度を調査し、発病株率および次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 50)\} \times 100$$

- A : 全ての葉身に病斑が見られ、萎ちよう枯死した葉身もある
- B : 全ての葉身にかなりの病斑がみられる
- C : 大半の葉身に病斑がみられる
- D : 展開した葉身に病斑が散見される
- E : 葉身に病斑を認めない

なお少発生の場合は株ごとの発病葉数を調査し、発病株率および発病葉率を算出する。

② べと病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の50株について発病程度を調査し、発病株率および次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A : 病斑が葉面積の51%以上を占める
- B : " 31～50%を占める
- C : " 11～30% "
- D : " 10%以下 "
- E : 病斑なし

なお、少発生の場合は株ごとの発病葉数を調査し発病株率および発病葉率を算出する。

③ 黒斑病

べと病に準ずる。

④ 白絹病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の50株について発病の有無を調査し、発病株率を算出する。

(17) じゃがいも

① 疫病

散布前および最終散布の約1週間後に、任意の20株について発病の有無および発病程度を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 20)\} \times 100$$

- A : 葉はほとんど(3/4以上)枯死、ときに茎部も枯死
- B : ほとんどの葉が発病、枯死葉がかなり多い(1/2程度)
- C : ほぼ1/2の葉が発病、ときに一部の葉が枯死
- D : 1/4程度の葉が発病
- E : 発病なし

なお、少発生の場合は発病(小)葉率を調査する。

② そうか病

収穫時に任意の10株を掘り取り、全塊茎の発病の有無および発病の程度を調査し、病いも率および発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) \div (4 \times \text{調査いも数})\} \times 100$$

- A：甚（病斑面積がいもの表面積に対して26%以上）
- B：多（　　"　　13～25%未満、または病斑数が11～20個）
- C：中（　　"　　3～13%未満、　　"　　4～10個）
- D：少（　　"　　3%未満、　　"　　1～3個）
- E：無（発病なし）

③ 黒あざ病

収穫時に任意の10株を掘り取り、全塊茎の発病の有無（菌核の付着状況）を調査し、病いも率を算出する。

(18) さつまいも

① かいよう病

定植1ヶ月後に畑全面を観察し、発病面積率を目算で求める。

② つる割病

定植1ヶ月後に任意の25株について発病株率を調査する。

③ 黒あざ病

定植1ヶ月後に任意の25株について発病いも率を調査する。

(19) たまねぎ

① 白色疫病、べと病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の50株について発病程度を調査し、発病株率および次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) \div (4 \times 50)\} \times 100$$

- A：病斑が葉面積の51%以上を占める
- B：　　"　　26～50%を占める
- C：　　"　　6～25%　　"
- D：　　"　　5%以下　　"
- E：病斑なし

なお、少発生の場合は発病株率を算出する。

F. 野菜害虫

(1) コナガ, アオムシ (アブラナ科野菜)

散布前と最終散布の7～10日後に、15株について幼虫、蛹数を調査する。
 粒剤の場合は、散布の14日後に同上の調査をする。
 灌注する液剤の場合は、定植の14日後に同上の調査をする。

(2) ハイマダラノメイガ (アブラナ科野菜)

散布前と最終散布の7～10日後に、15株について幼虫数を調査する。
 粒剤の場合は、散布の14日後に同上の調査をする。

(3) タマナギンウワバ, オオタバコガ (野菜共通)

散布前と最終散布の7～10日後 (IGR剤・BT剤は14日後) に、15株について幼虫数を調査する。
 粒剤の場合は、散布の14日後に同上の調査をする。

(4) ヨトウムシ類 (ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ等) (野菜共通)

散布前と最終散布の7～10日後 (粒剤・IGR剤・BT剤は14日後) に、15株について幼虫数を調査する。多発生ときは15株について各株の食害程度を下記の基準によって調査し、次式により被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \{(3A + 2B + 1C) / (3 \times 10)\} \times 100$$

A : 芯葉 (結球部) まで食害が多い

B : 外葉の食害は多いが、芯葉 (結球部) まで食害されていない

C : わずかに食害されている

(5) アブラムシ類 (すいか・かぼちゃ・きゅうり・メロン・トマト・なす)

散布前および最終散布の5～7日後に、任意に選んだ10株について、すいかとかぼちゃでは各株の中位葉3枚の平均虫数を、きゅうりとメロンについては各株の主たる中位葉2枚の平均虫数を、トマトとなすについては各株の上位葉2枚の平均虫数を下記の基準によって調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 10)\} \times 100$$

A : 株あたりの寄生虫数が201匹以上の株数

B : " 51～200匹 "

C : " 11～50匹 "

D : " 1～10匹 "

粒剤、灌注する液剤の場合は、散布の14日後に同上の調査をする。ただし、定植時処理剤については処理14日後、28日後に同上の調査を実施する。

(6) アブラムシ類 (はくさい・キャベツ・だいこん・ブロッコリー・なかじまな)

散布前および最終散布の5～7日後に、任意に選んだ25株について、株ごとに寄生程度を下記の基準によって調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 25)} \right\} \times 100$$

A :	株あたりの寄生虫数が201匹以上の株数
B :	51～200匹
C :	11～50匹
D :	1～10匹

粒剤の場合は、散布の14日後に同上の調査をする。ただし、定植時処理剤については処理14日後、28日後に同上の調査を実施する。

灌注する液剤の場合は、定植の14日後に同上の調査をする。

(7) アブラムシ類 (ばれいしょ)

散布前および最終散布の5～7日後に、10株20複葉(1株2複葉)の寄生虫数を下記の基準によって調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \left\{ \frac{(5A + 4B + 3C + 2D + E)}{(5 \times 20)} \right\} \times 100$$

A :	1複葉あたり30,001匹以上
B :	3,001～30,000匹
C :	301～3,000匹
D :	31～300匹
E :	1～30匹

粒剤、灌注する液剤の場合は、散布の14日後に同上の調査をする。ただし、定植時処理剤については処理14日後、28日後に同上の調査を実施する。

(8) アブラムシ類 (れんこん：粒剤)

れんこんの葉茎伸長期に(薬剤処理の2週間から1か月後を目安とする)、畦畔沿いに任意の50茎について、アブラムシの寄生茎率を調査する。

(9) ハダニ (すいか・かぼちゃ・きゅうり・メロン・いちご・なす・きく)

散布前および最終散布の5～10日後に、任意に選んだ10株について、すいかとかぼちゃについては各株の中位葉3枚の平均虫数を、きゅうりとメロンについては各株の主つる中位葉2枚の平均虫数を、いちごについては株あたり3葉の平均虫数を、なすときくについては各株の中位葉3枚の平均虫数を下記の基準によって調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 10)} \right\} \times 100$$

A :	株あたりの寄生虫数が51匹以上の株数
B :	11～50匹
C :	3～10匹
D :	1～2匹

(10) チャノホコリダニ、アザミウマ類（なす）

散布前および最終散布の約2週間後に、任意に選んだ5株について被害果率を調査する。

(11) コガネムシ類（さつまいも）

収穫時に10株を任意に掘り起こし、食害いも率を調査する。

(12) アザミウマ類（トマト・きゅうり・すいか）

散布前および散布の5～7日後（株元処理は2週間後のみ）に、5株について1株あたり2枚の展開葉または3花に寄生する平均虫数（成・幼虫数）を調査する。

(13) タネバエ（だいこん）

収穫時に30本を任意に抜き取り、根部の食害株率を調査する。

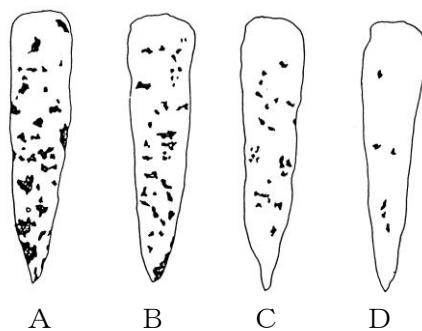
(14) ネキリムシ類（だいこん・ブロッコリー・ねぎ）

育苗期または本圃での播種時や植付時の処理の場合は、播種・植付14日後頃と21日後頃に、任意に選んだ50株について被害株率を調査する。生育期処理の場合は、散布前と14日後頃に調査する。

(15) キスジノミハムシ（だいこん・かぶ）

収穫時に任意に25株を選び、下記の基準図に従って株ごとの被害程度を調べ、次式により被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 25)} \right\} \times 100$$



(16) ハスモンヨトウ（エダマメ）

散布前および散布の5～7日後に、任意に選んだ50株について1株あたりの食害発生面積を調査し、次式により食害度を算出する。

$$\text{食害度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 50)} \right\} \times 100$$

- A : 株あたりの食害面積率が51%以上の株数
 B : " 26～50% "
 C : " 11～25% "
 D : " 1～10% "

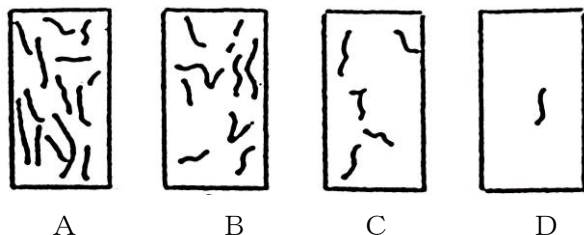
(17) ネグサレセンチュウ (だいこん)

収穫時に任意に50株を選び、根部の被害有無を調査し、被害株率を算出する。

(18) ネギハモグリバエ (ねぎ)

散布前および処理20～25日後に任意に選んだ50株について調査する。葉ねぎでは被害葉率を、根深ねぎでは各株の最大被害葉について、下記の基準図に従い被害程度を調査し、次式により被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \left\{ (4A + 3B + 2C + D) \div (4 \times 50) \right\} \times 100$$



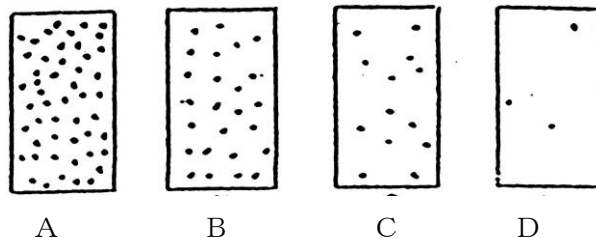
(19) クロバネキノコバエ類 (ねぎ)

収穫時に任意の50株を選び、被害株率を調査する。

(20) ネギアザミウマ・アザミウマ類 (ねぎ)

散布前および処理20～25日後に任意に選んだ50株について調査する。葉ねぎでは被害葉率を、根深ねぎでは各株の最大被害葉について、下記の基準図に従い被害程度を調査し、次式により被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \left\{ (4A + 3B + 2C + D) \div (4 \times 50) \right\} \times 100$$

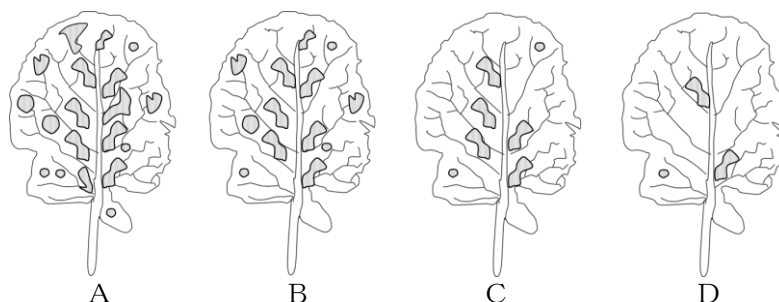


(21) ネギアザミウマ・アザミウマ類 (キャベツ、ブロッコリー)

処理20～25日後に任意に選んだ15株を調査する。各株の最大被害葉について、下記の基準に従い被害程度を調査し、次式により被害度を算出する。
灌注する液剤の場合は、定植の14日後に同上の調査をする。

$$\text{被害度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 15)\} \times 100$$

- A : 全葉面積の2分の1以上に被害が認められる
- B : " 4分の1～2分の1に被害が認められる
- C : " 8分の1～4分の1に被害が認められる
- D : " 8分の1以下に被害が認められる
- E : 被害が認められない



(調査基準のイメージ)

(22) シロイチモジヨトウ (ねぎ)

散布前および散布5～7日後に、任意に選んだ50株について幼虫数を調査する。

(23) ネギコガ (ねぎ)

散布前および最終散布の7～10日後に任意に選んだ50株について被害葉率を調査する。

(24) オンシツコナジラミ、タバココナジラミ、シルバーリーフコナジラミ

(トマト・きゅうり)

散布前および散布5日後、14日後に、任意に選んだ5株について、1株あたり中～上位の3葉(3小葉×3葉)に寄生する成虫、幼虫及び蛹数を調査する。

(25) ウリノメイガ (メロン)

散布前および散布10日後に、任意に選んだ未展開葉50葉の食害数を調査する。

(26) ハモグリバエ類 (トマト・未成熟ふじまめ・かぼちゃ)

散布前と最終散布の7～10日後に任意に選んだ15株について調査する。各株の中～上位3葉について潜孔内の幼虫数を調査する。

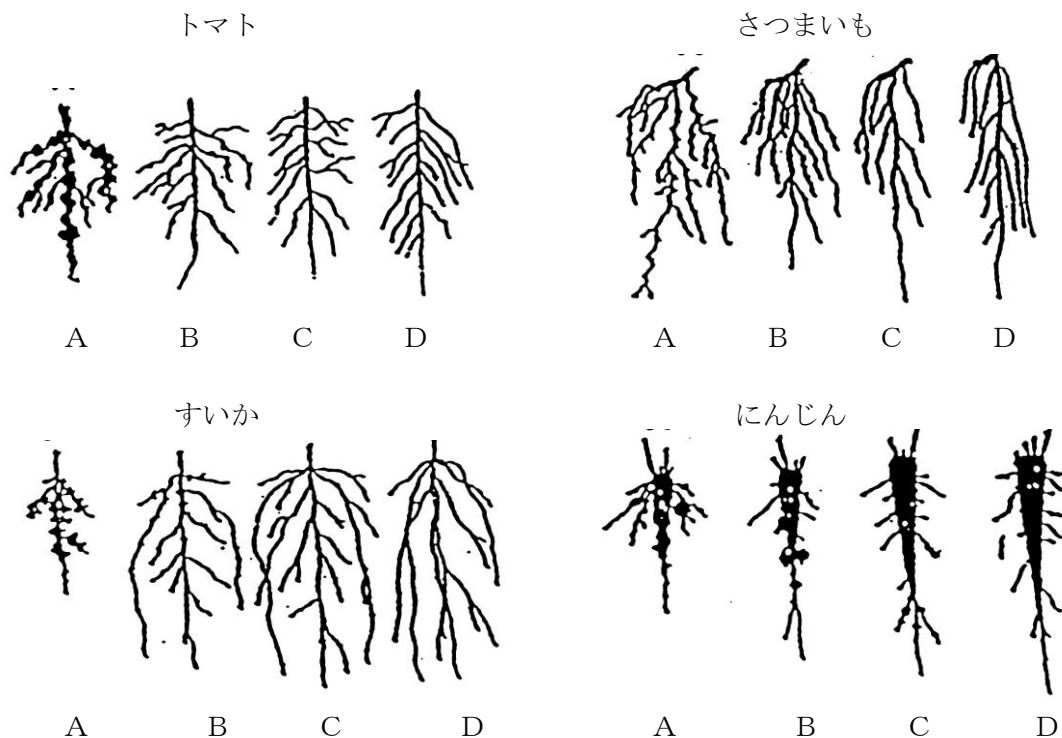
粒剤の場合、散布14日後に同上の調査をする。

(27) ネコブセンチュウ (にんじん・すいか・さつまいも・トマト)

収穫時に任意に25株を選び、下記の基準図に従って株ごとの被害程度を調査し、次式により被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \{(4A + 3B + 2C + D) \div (4 \times 25)\} \times 100$$

- A : こぶが特に多く、かつ大きい
- B : こぶの数が多い
- C : こぶの形成が中程度
- D : こぶをわずかに認める
- E : 被害が認められない



(28) ネコブセンチュウ (やまのいも)

収穫時に任意の25株を選び、被害株率を調査する。また、観察により被害程度を甚・多・中・少・微・無で評価する。

(29) ヤマノイモコガ (やまのいも)

散布前および散布の5～7日後に任意に選んだ30株について、幼虫数を調査する。

(30) ホウレンソウケナガコナダニ (ホウレンソウ)

任意に選んだ50株について、被害株率を調査する。季節や施設等の状況によって、作物の生育や害虫の発生が異なるため、調査時期は被害の分かりやすい時期とする(おむね本葉6葉期～収穫前)。

G. 花き病害**(1) きく**

① 白さび病, 黒さび病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の10株（複数本立てている場合には、そのうちの一本）について上位展開葉10枚の発病を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(3A + 2B + C) / (3 \times 100)\} \times 100$$

A : 1葉あたり病斑数31以上

B : " 11～30

C : " 10以下

D : 病斑なし

H. 花き害虫

(1) アブラムシ類 (きく)

散布前および散布 5～7 日後に、任意に選んだ 10 株について各株の上位葉 3 葉の平均虫数を下記の基準で調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \left\{ \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{(4 \times 10)} \right\} \times 100$$

A : 株あたりの寄生虫数が 201 匹以上の株数

B : " 51～200 匹 "

C : " 11～50 匹 "

D : " 1～10 匹 "

(2) ハスモンヨトウ, オオタバコガ

散布前および散布 5～7 日後 (IGR・BT 剤は 14 日後) に、任意の 20 茎について幼虫数を調査する。

(3) ミカンキイロアザミウマ

散布前および散布 5～7 日後 (IGR 剤は 14 日後) に、同一の 10 茎・10 葉について寄生虫数を調査する。

(4) アメリカシロヒトリ

散布前および散布 5～7 日後 (IGR・BT 剤は 14 日後) に、10 本の新梢について幼虫数を調査する。

(5) ナメクジ類, カタツムリ類

散布 1 日後と 3 日後の午前中の早い時期に、 m^2 あたりの誘殺虫数を調査する。薬剤散布は夕刻が望ましい。

I. 果樹病害

(1) なし

① 黒星病, 黒斑病, 赤星病, うどんこ病

散布前および最終散布の約10日後に、20本の新梢を任意に選び発病葉率を調査する。

② 輪紋病

収穫時に100果を任意に抽出し発病果率を調査する。また、落葉後の新梢20本についていぼ発生数を調査し、1本あたりのいぼ数を算出する

③ 胴枯病

病斑部の表皮を削り取り、病斑の大きさを測定(上下、左右の長さ)した後、薬剤を塗布する。塗布後3ヶ月以降に病斑の大きさを再び測定し、病斑の拡大程度を慣行薬剤と比較する。

(2) りんご

① 黒星病, 赤星病, うどんこ病, 褐斑病

散布前および最終散布の約10日後に、20本の新梢を任意に選び発病葉率を調査する。

② 輪紋病, 黒点病, すず斑病, すず点病, 炭そ病

収穫時に100果を任意に抽出し発病果率を調査する。

③ 斑点落葉病

散布前および最終散布の約10日後に、20本の徒長枝を任意に選び発病葉率および落葉率を調査する。

④ モニリア病

散布前および最終散布の約10日後に、20本の新梢を任意に選び発病葉率および発病花叢率を調査する

(3) もも

① 灰星病, ホモプシス腐敗病

収穫時に50果を任意に抽出し発病果率を調査する。

② 黒星病

収穫時に50果を任意に抽出し発病状況を調査し、次式により発病果率および発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \frac{(6A + 4B + 2C + D)}{(6 \times 50)} \times 100$$

A: 病斑が51個以上または多数の病斑が癒合コルク化し、亀裂を生じているもの

B: 病斑が21~50個のもの

C: " 6~20個のもの

D: " 5個以下のもの

E: 病斑なし

③ せん孔細菌病

葉と果実について、最終散布の15～20日後に調査する。ただし、休眠期散布の場合は、生育期の防除は慣行とし、二次感染が繰り返されると休眠期散布の効果が分かりにくくなるので、時期を失しないよう6月中～下旬に調査する。

葉の発病は、任意の20新梢について全葉の発病の有無を調査し、発病葉率を算出する。落葉が多い場合は落葉率も合わせて調査する。果実の発病は50果について発病の有無を調査し、発病果率を算出する。

(4) うめ

① 黒星病

収穫時に任意に選んだ50果について程度別発病果数を調査し、次式により発病果率および発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(6A + 4B + 2C + D) / (6 \times 50)\} \times 100$$

- A : 病斑が21個以上の果数
- B : " 9～20個 "
- C : " 4～8個 "
- D : " 1～3個 "
- E : 病斑なし

(5) かき

① うどんこ病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の20本の新梢を任意について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(10A + 6B + 3C + D) / (10 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A : 病斑が葉面積の3/4以上を占める
- B : " 1/2～3/4未満 "
- C : " 1/4～1/2未満 "
- D : " 1/4以下 "
- E : 病斑なし

② 落葉病

7月下旬～8月下旬に2～3回散布する。散布前および最終散布の約15日後に、任意の20本の新梢について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A : 病斑が葉面積の3/4以上を占めるか、落葉したもの
- B : " 1/2～3/4未満を占めるか
- C : " 1/4～1/2未満 "
- D : " 1/4以下 "
- E : 病斑なし

③ 炭疽病

最終散布の約10日後に、任意の50本の新梢について発病新梢数、病斑数、病果率を調査し、発病新梢率、1枝あたり病斑数、発病果率を算出する。

④ 灰色かび病

本病は7月にはいると、葉および果実の成熟、気温の上昇などから発病しなくなるので、6月中に散布および調査を終了する。5月上旬加羅月中旬に1～2回散布し、最終散布の約10日後に、任意の30本の新梢について全葉の発病を調査し発病葉率を算出するとともに、50果（幼果）を任意に選び、がく片の発病の有無を調査し、発病果率を算出する。

(6) ぶどう

① ベと病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の20本の新梢について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

(a) 発病葉による場合

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

A : 病斑が葉面積の51%以上を占めるか、落葉したもの

B : " 31～50%を占める

C : " 11～30% "

D : " 10%以下 "

E : 病斑なし

(b) 発病果による場合

最終散布の7～10日後に、任意の100果穂について発病程度を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 100)\} \times 100$$

A : 51%以上の果粒に発病しているもの

B : 21～50% "

C : 11～20% "

D : 10%以下 "

E : 病斑なし

② 灰色かび病

落花後に任意の100果穂について発病果率を調査する。

③ うどんこ病

散布前および最終散布の約10日後に、1～3樹より100果房および100葉を任意に選び、発病果および発病葉数を調査し、発病果房率と発病葉率を求める。また、次式により発病度を算出する。

(a) 発病葉による場合

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査果房数})\} \times 100$$

A : 51%以上の果粒に発病し、81%以上の穂軸に発病している

B : 21～50%の果粒、または51～80%の "

C : 11～20%の果粒、または21～50%の "

D : 10%以下の果粒、または20%以下の "

E : 発病を認めない

④ 黒とう病

最終散布の10～14日後に、1樹あたり100枚の成葉（1区あたり3樹、計300枚が望ましい）について発病程度を調査し、発病葉率を求めるとともに次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(5A + 3B + 1C) / (5 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A：病斑が31個以上
- B：病斑が11～30個
- C：病斑が10個以下
- D：病斑なし

④ 褐斑病

散布前および最終散布の約10日後に、任意の20本の新梢について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A：病斑が葉面積の1/2以上を占めるか、落葉したもの
- B：病斑が11個以上で面積が1/2以下のもの
- C： " 4～11個のもの
- D： " 1～3個のもの
- E：病斑なし

⑤ 晩腐病

成熟期に100果房について、発病程度を下記の基準により調査し、発病率および発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(7A + 5B + 3C + D) / (7 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A：1房あたり51%以上の果粒が発病
- B： " 21～50%の果粒が発病
- C： " 6～20%の果粒が発病
- D： " 5%以下%の果粒が発病
- E：発病果粒なし

(7) キウイフルーツ

① 灰色かび病

(a) 果実による場合

貯蔵、または追熟後に任意の100果について発病果率を調査する。

(b) 葉による場合

最終散布の約10日後に、任意の20本の新梢について全葉を調査し、次式により発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査葉数})\} \times 100$$

- A：病斑が葉面積の51%以上を占めるか、落葉したもの
- B： " 31～50%を占める
- C： " 11～30% "
- D： " 10%以下 "

② 果実腐敗病

貯蔵、または追熟後に任意の100果について発病果率を調査する。

③ かいよう病

最終散布の15～20日後および1か月後に、任意の20新梢について全葉の発病の有無を調査し、発病葉率を算出する。

(8) いちじく

① 疫病・黒かび病

収穫時に任意の50果について発病果率を調査する。

J. 果樹害虫

- (1) キンモンホソガ, ギンモンホソガ, ギンモンハモグリガ (りんご) およびケムシ類 (りんご・ぶどう)

散布前および最終散布の10～25日後に、新梢中位葉50枚を任意に選び被害葉率を調査する。

- (2) カメムシ類 (なし)

無袋栽培で試験する。散布前および最終散布の約15日後に、50果について被害の有無を調査し、被害果率を算出する。

- (3) カイガラムシ類 (りんご・なし・うめ・もも・かき)

無袋栽培で試験する。収穫期に50果を任意に選び被害果率を調査する。

- (4) ニセナシサビダニ (なし)

生育散布は散布前および最終散布の約10日後に、休眠期散布は散布前および新梢伸長期に、30葉を任意に選び被害程度を調査し、次式により被害度を算出する。

$$\text{被害度} = \{(6A + 3B + C) / (6 \times 30)\} \times 100$$

A: 葉は枯れ込みを生じ、奇形化とサビ症状が著しい

B: 葉は奇形化するか内側に巻き、サビ・モザイク症状がかなりある

C: サビ・モザイク症状が少しある

D: 被害なし

- (5) ハマキムシ類 (りんご・なし)

散布前および最終散布の約15日後に、30本の新梢を任意に選び被害新梢率を調査する。

- (6) アブラムシ類 (りんご・なし・うめ・もも)

散布前および最終散布の約10日後に、新梢から30葉を任意に選び寄生虫数を調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \{(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times 30)\} \times 100$$

A: 葉あたりの寄生虫数が101匹以上の葉数

B: " 51～100匹 "

C: " 11～50匹 "

D: " 1～10匹 "

- (7) シンクイムシ類 (りんご・なし・すもも)

無袋栽培で試験する。収穫期に50果を任意に選び被害果率を調査する。

- (8) モモシンクイガ (りんご・すもも)

無袋栽培で試験する。収穫期に50果を任意に選び被害果率を調査する。

- (9) モモハモグリガ (もも)

散布前および最終散布の10～25日後に、新梢中位葉50枚を任意に選び被害葉率を調査する。

(10) ハダニ類（りんご・なし・ぶどう）

散布前および最終散布の約10日後に、なし：30葉を任意に抽出し、りんご：新梢から30葉を任意に抽出し、ぶどう：新梢の中間葉を30枚任意に選び寄生虫数を調査し、次式により寄生度を算出する。

$$\text{寄生度} = \{(4A + 3B + 2C + D) \div (4 \times 30)\} \times 100$$

A：葉あたりの寄生虫数が51匹以上の葉数

B： " 11～50匹 "

C： " 3～10匹 "

D： " 1～2匹 "

(11) チャノキイロアザミウマ（ぶどう）

6月中旬～7月下旬に2～3回散布し、最終散布の約15日後に30果穂を任意に選び、穂軸の観察により被害果率を調査する。

(12) フタテンヒメヨコバイ（ぶどう）

散布前および最終散布の約10日後に、10本の新梢を任意に選び、各新梢中で寄生が多いと判断された1葉について（計10枚）寄生虫数を調査する。

(13) コガネムシ類（ぶどう）

散布前および最終散布の3～7日後に、任意に選んだ新梢中位葉50枚の寄生虫数を調査する。

(14) カキヘタムシガ（かき）

2世代幼虫を対象に、薬剤を8月中～下旬に散布し、9月中～下旬に50果を任意に選び被害果率を調査する。

(15) イラガ類（かき）

散布前および最終散布の約10日後に3～5樹から各結果枝20本を任意に選び、寄生虫数を調査する。

(16) コナカイガラムシ（かき）

7月上旬に任意の30枝について寄生虫数を計数する。

(17) チャノキイロアザミウマ，カキクダアザミウマ，カメムシ類（かき）

5月下旬～6月上旬に1～2回散布し、最終散布の20～25日後に50果（幼果）を任意に選び被害果率を調査する。

(18) アザミウマ類（いちじく）

最終散布の20～25日後に50果（幼果）を任意に選び被害果率を調査する。

(19) キボシカミキリ（いちじく）

任意の3樹について7月中旬の幼虫喰入孔数を計数する。

(20) モモノゴマダラノメイガ（くり・すもも）

収穫期に50果を採取し、被害果率を調査する。

(21) クリシギゾウムシ (くり)

収穫期に50果を採取し、約1か月間室温保管した後、被害果率を調査する。